

日本でイノベーションが生まれにくいと思った3つのポイント



先日約4ヶ月ぶりに日本出張に行った。期間は通常よりも少し長めの2週間。今回の目的はいつものクライアント回りに加え、メディア取材、日本オフィススタッフの面接、友人とのパーティー、幾つかのイベントへの参加と多岐に渡り、お会いさせて頂いた方々の数もかなり多かった。

しばらくサンフランシスコで生活をしてから久しぶりに日本に滞在すると、頻繁に行っていた時には気づかなかった事が幾つかある。その中でも今回は現在日本に最も必要とされている“イノベーション”がなぜ生まれにくいのかについて感じた事を簡単にまとめてみたい。

1. 起業家が評価されるポイント

日本に行くと言業者の方々や投資/金融関係の人々と会う機会が多い。経営者が集まるパーティーや、起業家向けのセミナー、ビジネスネットワークパーティに参加させていただくケースも多々ある。正直言うとそのような場所に行き会った方とお話をするたびに、非常に大きな違和感を感じる事がある。なぜなら自己紹介と会社の説明をした後の質問が、会社の規模や年商、資本金、利益率、時価総額などのいわゆる“ビジネス”的な点にフォーカスされる事が多いからだ。もちろんビジネスマンとしての立場としては恐らく妥当な質問だとは思いますが、アメリカの感覚だと会話の流れに違和感を感じる。単純に普段の生活でそのような質問をされる事になれていないし、自分自身も実はあまり意識していないので、戸惑ってしまう。

実はこれまでファウンダー/CEOという立場でアメリカでビジネスを10年ほどやってきて、サンフランシスコやシリコンバレーを中心とした地元の人達と話しをする際に、上記のような“ビジネス”的数字を聞かれた事はほぼ無い。

そんな事よりも彼らが興味があるのはビジネスを通しどんな面白い事をして、どのように社会に貢献をしているのか。他の会社とどこが違う、何が得意なのかである。これは投資家やVCでも同じで、彼らが最も知りたいのは事業のユニークさとマーケットにおける可能性で、具体的な数字は副次的なものである。逆に経営者としてどれだけ凄い数字をたたき出しても事業内容に面白みがない場合は、パーティー等でその話しをしても“So What? Good for you.”と言われてしまう。主にスタートアップを中心として、アメリカの人々が経営者に期待するのは、どんなに儲けているかよりもどれだけ人と違う面白い事を行っているかなので、ビジネス的な数字をあまり気にせず心置きなく今までに無いイノベーションを創り出す事を優先して経営が出来る。そしてユニークなカルチャー会社の方が優秀な人材を獲得しやすい。

その一方で日本だと“稼いだ者勝ち”、“事業規模が大きい方が凄い”、“従業員の平均給与額”、“脅威の利益率”等、社内外においても起業家や経営者に対しての評価軸がお金や数字であるのが常識とされている。もちろん、経営者たるもの年商を増やし、利益率を上げ、規模を大きくするのが仕事ではある。しかし、それだけにこだわっている人はアメリカではあまりクールだとは思ってもらえない。

日本とアメリカ(特に西海岸)では社会的にも起業家や経営者が評価されるポイントにおいて“ロマン”と“そろばん”との大きな違いがあり、“どれだけ面白い事やってみせるか”と“どれだけ儲けるか”の優先順位の違いが日本企業がイノベーションをおこす大きなハードルの一つとなっていると思われる。

スタートアップであっても日本の経営者は世の中の風潮的に数字的な結果を最優先する必要があり、突飛な事を始めにくい環境にいるからだ。

2. 遊び要素の少なさ

イノベーション = 今までに無いものを創り出すには既存の考え方を壊し、新しい視点から物事を捉える必要がある。その為には既存のやり方を変えて行かなければいけない。今まで常識だと思っていた考え方やプロセスを見直し、一新するには少々非常識と思われるぐらいの勢いが必要となる。例えば社内や会議の雰囲気一つとってみても、日本の会社は既存のプロセスとしきたりを尊重しすぎるが故に奇抜なアイデアや発言が出にくくなっている気がする。少しでも常識から外れた発言をするそこはアホかと思われる、場合によっては不謹慎だと思われるが、イノベーションに繋がるアイデアは意外とそのような所から出てきたりする。

例えばアメリカで新しいものを生み出す企業やスタートアップだと、社内のインテリアや雰囲気に遊び心があり、壁の落書きに始まり、個々の作業環境までそれぞれのスタッフの個性が出せる様になっている。まさに遊ぶ様に働く事で、楽しい雰囲気の中から新しいアイデアを出す事を促進している。会議中にジョークが飛び交うのも珍しく無い。

一方で日本の多くの会社社内の雰囲気は、コンプライアンスと言う言葉の元にかなり退屈なものになっていると感じる事が多かった。会議の最中も周りの空気を読むことに気が行ってしまい、面白いアイデアがあっても積極的に発言する事を控えてしまっているケースがあった。また、仕事以外の時間を見ても、つつい仕事を優先してしまうが故に会社の人や取引先と飲みに行ったりと、関わっている人や話している内容が仕事に関係しているケースがとても多い。それ自体は全く問題が無いし、仕事をより円滑に進める為に貢献していると感じるが、仕事とは全く関係の無い人や、異なる業界、年齢層と人達と接する機会が少し少ないとも感じた。

例えばIT業界であれば、交友関係のほとんどが同じIT業界の人達だったり、学生と社会人の接点がすくなかったり等、仕事以外の遊びの時間を通じて視野を広げ、発想の豊かさを養う機会が日本には少し乏しいとも感じた。

イノベーションは異なるバックグラウンドを持つ人々と案外くだらないと思われる会話の中で生まれる事も多い。パーティー文化のアメリカではほぼ毎日の様に老若男女の隔たりを超えた人々の交流が盛んである。

<ブレンマッサージコーナー>副詞・接続詞の読みとりです。正解は次ページの下部にあります。



1. 些か
2. 徐に
3. 嘗て
4. 予て
5. 奇しくも
6. 蓋し
7. 挙って
8. 悉く
9. 而も
10. 頻りに
11. 暫く
12. 頗る
13. 乃ち
14. 偶に
15. 終ぞ
16. 序に
17. 如何して
18. 就中
19. 偏に
20. 将に
21. 寧ろ
22. 尤も
23. 専ら
24. 漸く
25. 漸う

3. サバイバルコストの高さ

今回日本に行くにあたり、直接仕事に関係ない場合でもお世話になっている方や前々から交友関係のある人達にお声をかけた。しかし先方の仕事が忙しすぎて会う時間が無いケースが幾つかあった。また、運良く仕事が終わった場合でも、会えたのが午前3時過ぎの場合もある。一般的な会社員でも勤務時間が極端に長く、仕事が忙しすぎる為に会いたい人に会うのもままならない。また、イベントやお食事会に行く予定でも仕事が長引いて結局行けなくなってしまふ。聞いてみるとそういう事はどうやら特殊なケースではなく、よくある事らしい。これはワーク/ライフバランスを大切にアメリカ国内の企業で働いている人達から考えるとかなりショッキングである。

一見すると日本とアメリカ、同じ先進国でも、日本の場合は生活する為に費やさなければいけない時間がかかり多い。働いている人達が仕事を優先するが故に犠牲にしなければいけない時間がかかり多く、社会で生き残る為に仕事を優先するのが常識となっている。言い換えると生きる為に費やさなければならない時間 = サバイバルコストが非常に大きい。そのような点を考えてみると、日本は意外と貧しい国なのではないかとも思ってしまった。

生きる事に精一杯になり、新しい事や面白いアイデアを考える時間と精神的余裕が無い状態が続いてしまうと、将来の事を考える余裕もなければ、人に会う事で得られるかもしれない大きなチャンスを逃している場合もあるだろう。そしてそのような状態だとイノベーションを生み出す事はかなり困難になる。目の前にある仕事にいっぱいいっぱいだと何かを変える事は非常に難しい。風は糸が緩んでいるときの方が高く揚がるように、イノベーションは気持ちにある程度余裕がある状態に生まれやすい。

アメリカでイノベーションをおこしている会社のその多くが、実にフレキシブルな労働環境、長期休暇の提供、極力残業をさせないの、従業員の気持ちに余裕を持たせ、新しいアイデアをどんどん採用する事で、企業としての競争力を高めているという側面もある。今のところ日本でそのようなポリシーを採用している会社はまだまだ少なく、従業員の多くが心と時間に余裕が無い日々を過ごしているのを何度か目の当たりにした。

最後に：

先日アジア系のテレビ局から取材を受けた際に、一番最初に現在の日本の状況と将来の展望を聞かれた。それに対しては大きな企業でもスタートアップでも少しずつイノベーションが生まれ始めたと言ったが、国際市場における将来的な展望は必ずしも明るくは無いかもしれないと説明した。取材後半にインタビューが“それでもあなたが日本企業の素晴らしい事を信じているのが伝わります”と言ってくれたのが嬉しかった。そもそも数十年前の日本はイノベーションにおける世界の中心だったと思う。自動車や電話製品、テクノロジー分野を中心に素晴らしい組織力で次から次へとイノベーションを生み出していた。

例えば創業時のソニーのミッションが“技能を最大限に発揮することのできる自由闊達にして愉快なる理想工場”であった様に、新しいものを創り出すには企業とそれを取り巻く世の中が自由で楽しい環境を提供する必要がある。しかし、自分が見ている限り、現在の日本の社会はかなりイノベーションを生み出しにくい環境になっていると思わざるをえない。普段生活しているサンフランシスコとはかなりのギャップを感じる。逆に日本からこちらに来られる方々は、“なるほどこういう環境だからイノベーションが生まれるんですね”と言われる。

そんな事もあり、btrax社では日本の方々の為に、長期でサンフランシスコに滞在し、イノベーションの本場で新規事業を創り出す為のプログラム、イノベーションブースターの提供を始めました。このプログラムを通じ、少しでも日本企業のイノベーション創造にご協力出来ればと思っています。

筆者：Brandon K. Hill / CEO, btrax, Inc. btrax Newsletter 5月号より転載



1. いささか
聊かとも。ほんの
少し、わずか

2. おもむろに
動き方がゆっくりし
ているさま

3. かつて
曾てとも。今まで
一度も。以前

4. かねて
前もって。あらか
じめ

5. いささか
不思議なことに。
あやしくも

6. けだし
思うに。確信的な
推定の気持ちを表す

7. こぞって
一人残らず。
あげて

8. ことごとく
尽くとも。
すべて。残らず

9. しかも
然もとも。そのうえ
それでもなお

10. しきりに
むやみに。程度や
度合いが強いさま

11. しばらく
少しの間。当分の間
久しく

12. すこぶる
たいそう。非常に

13. すなわち
即ち、則ち。そこで
とりもなおさず

14. たまに
まれに。たまさか

15. ついぞ
(打ち消しを伴い) 今
までに一度も

16. ついでに
その折に。その時に

17. どうして
どんな風にして。
どうやって

18. なかんずく
とりわけ。特に。
その中で

19. ひとえに
もっぱら。ただただ
ひたすらに

20. まさに
ちょうど今。
今にも

21. むしろ
どちらかと言えば。
いっそ

22. もっとも
そうはいうものの。
一方で。ただし

23. もっぱら
(他をさしおいて)、
いわずに

24. ようやく
次第に。だんだんと
やっと

25. ようよう
しだいに。ようやく
より古風なことば